クリサリス

古賀　勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリサリス

【Ｎコード】
Ｎ３１５３Ｆ

【作者名】
古賀　勇樹

【あらすじ】
暗い闇世の中、その銃は獲物を捕らえる。人を殺すことの出来ない殺し屋、佐薙に課せられた依頼は重く、そして大変な物であった。その”老人を殺すという”という簡単で難しい依頼を佐薙はこなす事が出来るのか

暗い闇世の中、にょきりと黒い銃身が静かに標的へと真っ直ぐ伸び、その銃のグリップを握り締める長身の男の鋭くぎらつく眼差しは確かに標的を捉えたまま、微動だにせず、男の胸は音も立てず静かに上下する。ふっと静かな溜息が漏れ、そして直ぐにその冷たい銃口から鉛の玉が音速を超える勢いで飛び出す。リボルバー式の拳銃はその構造ゆえにサプレッサーの効果を望めず、ひゅんと空気の張り裂けるような甲高い音が静寂を切り裂くも、哀れな標的にはその音に首を上げる暇すら与えられない。

一瞬の喧騒の後には先程と同じ、何も変わらない再び静寂が戻る。

「つまり、この爺さんを殺せと、そういう依頼だな」狭く、デスクぐらいしかない部屋の中、他人より多少長く、生まれつき茶色がかった髪を持つ長身の青年が確認する。

「そうです、そうなんです」一方やや小柄で小汚いチェックの模様をあしらった服を着た中年の男が失敗の言い訳を上司にするかの様に怯えながら、おどおどした頼りない口調で言う。

「なら話はついた。さっさと帰れ」青年は声を尖らせて脅すようにきっと睨みつけ、低く唸るような声で言い放つ。その眼光、声、あらゆる物は殺気を孕み、場を威圧する。中年の男は竦み上がり、言葉も発せないままに、尻尾を巻き、逃げるように部屋を慌てて出る。

青年、佐薙はふう、と漏らすように溜息を吐き出すと、椅子に腰を下ろす。静かに冷め切った眼差しを向けたままデスクの引き出しを開け、無造作に転がっている蛇の王者の名を冠する拳銃を眺める。そして再び溜息を漏らす。

依頼の内容は簡単だった、ある老人を殺す事、手段は問わない。報酬は巨額。何とも割りのいい仕事ではある。老人は往々にして動きも緩慢、注意力も鋭いわけではない。なので狙いをつければ調査

も実行も容易いものではある、殆どの場合に於いては。
彼は眼を静かに瞑り、そしてそのまま深く、深く息を押し出す。そして、そのまま椅子に凭れかかり、まどろみの中へ自らを誘い、そして先程の猛々しさを持った者と同じとは思えないほどの静かで、規則的な息をする。
幾許の時が経ったであろうか、電話の音がけたたましく狭い部屋の中で激しい反響を伴って鳴り響き、佐薙は不機嫌そうに長めの髪を掻き揚げながら眼を覚ます。彼は電話を取ろうと、窓際のデスクに近づき、ついでと言わんばかりに窓のブラインドを上げる。昼間とはまた違った明るさが街を支配している。眠る事のないままに蠢く人々は一体何をしたいのだろう、と思いながら彼は電話を取る。すると録音された無機質の声が化粧品に関するアンケートをとっていた。無駄だと解っていながらも「ふざけるな」と彼は怒鳴りつけ、もう一眠りしよう、と再び椅子にもたれかかる。
しかし、唐突に醒めてしまったまどろみは戻ることなく、どうにもする事がないので彼は街に出る事にした。
苛々した時、彼はよく街に出る。特に目的もなく歩くだけで人間がいかに矮小な存在であるかを再確認できる場所、それは雑踏の中だと彼は信じている。人間が矮小であることを確認できると、その小さな物が持つ悩みや苛立ちなど考えるに足らない塵芥のような物に思えてどことなくほっとできる、それは彼の不思議な、とも言える性質であった。そうして兎に角彼は苛ついたときに街に出る。
彼は流石にシャツ一枚では拙い、とクローゼットから乱暴にノースリーブの服を引っ張り出すと、それを被るようにして着る。そしてそのまま乱暴にドアを閉め、鍵を掛け、アパートの階段をつかつかと降りていく。
「ヒヤマ荘」、何処にでもありそうな名前、外見のアパート、だがその実態はとても尋常なる者ではない。アパートの持ち主が、向こうの世界、即ち佐薙たちの住む世界の住人であり、またその所為もあって、住人たちもほぼ全員がそちらの世界の住人である。合言葉、

寧ろ安全に生きる為のコツは他人に干渉しない事、そんな殺伐とした空間である。

彼は階段を降りきると、一切その後ろを振り返ることすらせずにそのまま地面を蹴りだした。足音だけが静寂の中に高らかに響いていく。直ぐ、と言うには多少長い時間を置いて、静寂が再び場を支配した。誰一人としてそのことは気にも留めない。直ぐに各々の生活に戻る。ただ月だけが浮かんでいた。

颯爽と誰もいない路地を駆け抜けて、彼は無人の駅に到着すると、形だけの改札を通り抜け、ホームの椅子にどっかりと座り込む。

夜の寒風が体を突き刺すが、それも束の間直ぐに電車がけたたましい音をかき立てて駅に滑り込んでくる。ほとんど誰も乗っていないそもそも走らせるメリットを欠片ほどにも感じられない電車に乗り込むと、彼は堂々と席を占領した。

時計の長針が半分も回らないうちに、今までとは対照的な景色を見る事が出来る。夜であることを忘れさせる明度、音、そして人の数。寧ろこれは昼間よりも明るく、煩く、そして人が多いのではないかとすら思わせる、実際にそうなのであろう。彼はふっと小さな溜息をつくとその人の流れに自らの身を任せる。瞬きをしないうちに彼の姿は雑踏の中へと消えていった。

ぶらぶらと目的もなく街を歩き回ると、至る所で本当に至る物に勧誘される、それらを悉くあしらいながら彼は只管違う場所を目指す。そしてぶらぶらとした後は直ぐに人のいない路地に入っていく。先ほど赤い自動販売機で買った、その自動販売機を設置している会社の名前にもなっている飲料の缶の蓋を開け、口をつける。もともと炭酸飲料が苦手だった佐薙だが、最近になって漸く飲めるようになった、そして飲めるようになってからどっぷりとはまり込むまでにそう時間はかからなかった。炭酸飲料で喉を潤すと苛々した気分は何処かへ飛んだようになる。すっきりした、とまでは言わずとも少なくとも苛立って仕方ないということはない。一気に中身を飲み干すと、路地から出ようとする。三人の目つきの悪い男が視界に入

った。
「兄ちゃん、金持ってない？　ちょっと俺ら遊びすぎたみたいなんだけどさ」
一番の大男があくまで頼むような口調で脅しをかけてくる。脅しだというのは誰にでも解る。佐薙は哀れむような眼で相手を見る。途端、後ろの二人がげらげらと笑い出す、どうやら抵抗をしているととったらしい、相当腕に覚えがあるのか口元が釣り上がり、そして直ぐに拳が飛んでくる。佐薙の腹に拳が唸りを上げて入る。
彼のさほど重くない体は後ろに飛び、尻餅をつく。また後ろの二人がげらげらと下品な笑い声を上げる。余り面倒には巻き込まれたくないんだがな、と彼は呟くと立ち上がり、尻をはたいた。
「な、兄ちゃん。俺らあんまり時間掛けたくないんだけど、学生って忙しいんだ。兄ちゃんもわかるだろ？」大男が自慢かのように言う。学生、懐かしいな、と佐薙は思うと少しだけ微笑む。
「嘗めてんのか手前」そう大男が叫ぶと後ろの二人が追従する。
佐薙は先ず大男の腹にお返しといわんばかりの一撃を入れる。大男はそれだけで咳き込む。情けないな、と思いながら子分たちの位置を把握する。「ケンちゃん！」と痩せ気味のほうが叫ぶ。そして直ぐにこちらをきっと睨みつける。「おっさん、調子に乗んなよ」
親の脛を齧ってる奴が何を言ってやがる、と彼は髪を掻き揚げる。少し太り気味の方が思い切り殴りかかってくるその手を取り、捻る。痛ぇ！　と言う叫び声が聞こえて太り気味は倒れこむ。
痩せ気味は腰を退き、一瞬躊躇いながらも直ぐに決意したかのように飛び込んでくる。プライドと言うものがあるのだろう、そういう姿は嫌いじゃないな、と思いながら彼は相手の伸ばした腕より若干低い位置から足を伸ばす。腕より足が長いのは当然のこと、痩せ気味は自ら伸びた足に鳩尾を突っ込んで、う、と漏らしてから倒れる。三人のあからさまに素行の良さそうではない男が伸びている様は滑稽とも思えた。
佐薙はふう、と溜息をつくとそこを去ろうとする。後ろから砂利

の擦れる音がする。大男が立ち上がり、必死の形相でその拳を一度でも佐薙に当てんと飛び込んでくる。彼は振り向き、自らの体を僅かにずらし、足を伸ばす。大男は見事なまでに足に引っかかり、勢い余って前に激しく、無様につんのめる。

あっという間に決着はついた。痩せた男と大男は倒れ、太った男は倒れたふりをしながら早くこの災難が過ぎるのを待っている。特に追撃する気もないし、人に見られては面倒なので彼は足早にその場を後にした。

体がずきずきと痛むが、それを圧して彼はベッドから起き上がる。朝の陽光が彼の顔を照らす。久しぶりに人を殴りつける感触は悪くはなかった。

彼は時計を見て、意外と遅くまで眠っていた事に驚く。そろそろ調査を始めようと思っていただけに彼は若干の焦りを感じる。今回は、今回の仕事をこなす事が出来るか否かで自分の将来は完全に決定される、そんな予感がしていた。

彼は急いで冷蔵庫から適当な物を出し、口に掻き込む。それを買い置きのコーヒーで流し込むと彼は昨日とは違うノースリーブを着る。鞄の奥には丁寧に整備を終わらせた蛇の王者の名を冠した拳銃を隠す。特殊な形状で厚い鞄のそこに蓋がついており、その中に拳銃を収納し、上から蓋をする。少し入り組んだ手順を踏まなければ開けられない為そう簡単には拳銃を発見されない。勿論咄嗟の時の使い易さには欠けるが。

彼はバッグを持つと、部屋を出る。アパートの階段を駆け下りて、今回自分が殺すべき相手の居場所へと向かう、大体の見当はついている。彼は大きな深呼吸をしてから足早に無尽の駅へと向かった。

相変わらず誰もいない改札を抜け、大勢の人で込む電車に乗り込む。何故こんなにも多くの人が皆一様に同じ方向を目指すのかが彼には解らない、尤も彼も同じ方向へ向かっている一人ではあるのだが。彼は座る席も見つけずぼうっと立っていた。

時間があっという間に経っていたのか気づけば彼の目的とする駅であった。相当線路の端に位置し、降車する人は殆どいない、そもそも最早電車に乗っている人自体が殆どいないような、そんな寂れた田舎の駅である。彼はそこに降り立った。

以前、幼き頃常に見続けていたときよりも随分と寂れた、彼はそう思うと、駅を出た。相変わらず無人。

彼はバッグから帽子を取り出し、被る。これだけでも一見別人、況してや彼は幾年か前に突然町を飛び出して以後帰ってきていない、それにそもそもが周りと調和しているタイプではなかった彼を覚えているものなどそうはいないであろう、と彼は踏んでいた。それは違いなく彼とすれ違う人を彼は知らず、また向こうも到底知っている風ではなかった。彼は悠々と街路を歩いていく。

懐かしさも半分に道を過ぎた頃、彼は一人の老人を発見した。会わなくなって随分と経つが間違いなくその老人は今回自分が探している男に寸分の互いもなかった。佐薙の表情が途端険しくなる。

立ち止まり、距離を取る。これから殺す相手と接触を試みるというのは殺した後のことを考えてもあまり得策とは思えない、できれば一切の接触がない状態が最も好ましい。彼はゆっくりと、さりげなく相手を見る。

昔から変わっていないな、と思う。その力無げな背中、ゆるりとした歩き方。しかし、固い意志を持ったかのような目は恐らく今も健在なのだろう。顔を見る事は出来ないとはいえ、彼にもそれくらいの想像はついた。

老人はその緩慢な動きでまるで当ても無く彷徨っているかのように色々な所を徘徊する。彼もそれを適当な距離を置きながら尾行する。確かに話を聞いている限り、嘗ては様々なところで恨みを買いかねない事を平気でしていた老人だが、何故今更になってまでその命を代償としなければならないのだろうか、と思う。理由も解らず殺すことを彼は非常に嫌う。尤も、その主義ゆえに今まで請け負った依頼をこなすことができなかったのだが、彼にその主義を変える

気は無かった。
　まるで試されるかのように彼の請け負う依頼は彼の望む理由での殺しが無かった、大半の一般的な平和的教養を持った人に言わせれば殺しに値するだけの正当な理由など無いのだろうが、彼は違った。理由如何ではその代償に命が出てくることもある、と彼は考えている。そしてそのために彼は殺す相手の調査を怠らない。しかし彼の請け負う依頼は往々にして下らない理由の下にされた物が多かった。彼はうんざりするとともに、今時人の命の価値はここまで落ちてしまったのか、と嘆いた。
　そうして彼は様々な事を考えながら尾行を続ける。興味は漸く今回の依頼の理由に向く。
　何故この爺さんが殺されなければならないのか。あの依頼人はとても人一人の命を左右する程肝が据わっているようには見えなかった、どちらかと言うと誰かに依頼と言う汚れ仕事、またいざと言う時に最も足のつき易い仕事を任された何かの末端と見るほうが堅実そうであった。そうすると何らかの大きな組同士の抗争か、と考え彼は違うな、と呟く。あの老人は大きな組に所属しているというはずがない。なら個人的な恨みを買ったか、その線も薄いだろう、と彼は思案をめぐらす。こんな田舎町で細々と暮らしていてそう恨みを買う事案はないはずだ、と。まあ、それも尾行を暫く続ければ解る事か、と彼は前を見る。
　誰もいなくなっていた。
　見失ったか、と慌てて彼は辺りを探る。しかし何処にも人影はない。余りに思案を続ける余りに見失ったのか、と自らを恥じてから、余り人目に付くわけにも行かないな、と踵を返すと駅へと向かって歩み始める。途中にあった自動販売機で飲み物を一杯買い、飲みながら歩く。途中の屑籠に乱暴に缶を投げ込むと丁度良く現れた電車に乗り込む。外を眺めながら彼の体は物凄い速さで町から遠ざかっていった。
　迷うことなく彼は駅に降りると脇目も振らずにアパートへと向か

っていく。足早に階段を登ると部屋の扉を叩きつけるように開く。扉を閉めると鍵を閉め、そのまま弱弱しく座り込む。緊張感が一気に体を締め付ける。まるで縄で全身を縛られた上に重い岩を乗せられたかのような苦しさが襲い掛かり、彼は顔を顰める。

一体何なのか、その正体すらわからない不吉な予感とどろりとした不快感が体の中で犇き合う。彼は力なく部屋を出る、そして台所でどろりとした液がシンクを叩きつける音がした。直後、雨のような水の音。

彼は壁伝いに台所から帰ってくるとほぼ倒れるような状態でそのままソファに体を投げ出す。そして荒々しい息はやがて落ち着き、静かなリズムを作り始める。体が規則的に上下する。やがて静寂が部屋を覆い、動的なものは静的なものへと変貌を遂げる。

彼はそのまま時計の短針が二回りするまで目覚める事はなかった。そこから長針が二周りほどして、彼はあまりの空腹に眼を覚ます。時計を見るとあまり経っていない時間に驚き、そして空腹具合から何が起きたのかを察する。彼はもう自分で炊事をするのすら面倒になって財布を確認すると外に出た。

近場のファストフード店に出向き、朝専用のメニューを注文する。安く、早い。これだけでもファストフードは便利と言わざるをえないな、と彼は思う、思っているうちに目の前には注文したメニューが並んでいた。

注文したメニューを頬張りながら彼は今後の動きについて思案をめぐらす。ひょいと長いフライドポテトを摘み、口に運びながら彼は結論に辿り着く。実行は、延期。昨日のことを考えるととてもすぐに実行はできそうになかった。彼はゆっくりと、その時間を吟味するかのようにフライドポテトを摘み、ハンバーガーを口に運ぶ。そして付属していたジュースを飲み干した。

彼は店を出ると、暫く分の買い物が足りてない事に気づいた。彼は慌てて財布の中身を確認する。もう大分と軽くなっていることを改めて認識する。暫く前に前金で仕事を引き受け、そして何度目だ

ろうか、やはり失敗した。その際の前金、すなわち本来自分が得られるはずの金額の半分を手に入れ、そしてそれ以来仕事が入ってくることは無かった。殺せない殺し屋、それはつまり商売の出来ない商人と何ら変わらない。それはつまり、才能に恵まれていない、間違えた職についたことになる。

今度は、失敗できない。再度頭に叩き込む。ある意味では今度失敗すればそれは即ち死であり、それは決して彼の望んだ結末ではない。望んでいない結末はつまり最も忌み、避けるべき物である。

彼は近場にあるスーパーマーケットに入っていった。

簡単に品物を選び出し、籠に載せる。野菜類と肉、卵。それから牛乳を詰め、缶ビールの箱を籠の下段に載せ、それからゆっくりと歩く。様々な無何有の色が虹の様に散在し、一種のハーモニーを奏でる。生の色が生き生きと流れ出すようにあふれ出る。

生ける者の色を全身に浴びた刹那、彼は、すさまじい悪寒と共に、モノクロアウト感じた。全てが死に絶えたかのように灰色に染まり、動的な物は静的な物に向かう。世の中の全てが死に絶え、音すらもその活動を止め、静寂が現れる。絶望がどろりと体の周りを取り囲むような、この世で最も大きいと言っても過言で無いほどの悪意を感じて彼は力なく膝を折る。あまりに突然の異常事態に、彼は眼を擦る。途端、音が耳を叩き、色彩があふれ出す。さっきのは一体なんだったのだ、と彼は思いながらそして自分が尻餅をついた形で座り込んでいることに気が付いた。周りの奇異なものを見る視線に気づき、恥ずかしそうに立ち上がり尻を叩く。そしてなるべく何事もなかったかのようにそのままレジへと早足で向かった。脳裏に先程の映像が写る。彼は静かに眼を閉じた。

外に出ると彼は静かに、しかし確かに深呼吸をする。深く、深く。あらゆる不快を浄化するかのように長く、長く。空は蒼く明るく、彼を照らす。その光に安堵を感じ彼は安寧の溜息を落とす。しかし、その空が紺碧に写りこみ、白とは程遠い色の暗い雲が太陽を覆うようにしているのを彼は知らない。

彼は、重い袋を二つ抱えて、町を歩く。先程の悪寒が抜けず彼の顔色はまるで雨雲を孕み始めた今の雲の色のように優れない。大人の男が恰も辛そうにビニール袋を二つ下げて街中を闊歩している様は滑稽ですらあった。突然、彼は肩に衝撃を感じた。
「久しぶり、と言えばいいかな？」年季の入った声が彼を捉える。彼の額に汗がにじんで行く。
「お久しぶり、ですね。先生」彼はともすれば震えて上擦ってしまいそうな声を必死に落ち着けながら答え、そして振り向く。
「君のほうからはどうも用があるように思えたのだがな、クリサリス？」懐かしい呼び名だ、と佐薙は思う。そして、初めてクリサリスと呼ばれた日のことを思い出す。

先生、と自ら名乗る不思議な老人に出会ったのは、およそ彼が十五のときだった。中学校を卒業し、高校には行かず、自らの退屈な未来を悲観してただ、日々に意味を見出せずに荒んでいるだけの日々を送っている頃だった。
「君は、人を殺すのはいけない事だと思うかい？」突然背後に現れた初老の男性に問われた佐薙は不信感を顕にしながら、睨み付ける。
「何？　新興宗教か何かの誘い？　興味ないんだけど」
「ふふ、そう言われるとは思ったよ。悪いけど私は無神論者でね。宗教には全くと言って良いほど興味が無いんだ。ただ君には、人を殺す事がいけないことかどうかを聞きたいだけなんだ。君には素質があるように見える」初老の男性は笑顔で佐薙に問いかける
「なんのだよ。人殺しが許されるとでも思ってるのかあんたは？」
「許されるさ」男性は断言する。そして飄々とした声で聞く。
「君は、どう思うんだい？」
「理由次第だ。理由によっては許せる。何とか法典ってのでは人殺しをした人は殺されなきゃならないって聞いたぜ」
「なるほど、それは良いな。つまり君は理由次第では人殺しが許せると」不敵な笑顔で男性は問いかける。

「そういうことだ。何でそんな事訊くんだよ？」佐薙は心底不機嫌そうに男性を今にも殴ろうかと身構える。
「まあ、そういきり立つな。やはり君には資質がある。どうだい、殺し屋になってみたいとは思わないかい？」老人は突然、切り出す。あまりの事に佐薙は度肝を抜かれたような顔になり、直ぐに顰める。
「オッサン、人を馬鹿にしてんのか？」語尾を強め、威嚇するように怒鳴りつける。そしてきびすを返してその場を去ろうかとする。
「私の質問は、イエスか、ノーか、だ」それ以外の答えは求めていない、と続きそうな勢いでまるで生徒をいさめる教師のように言う。途端、佐薙の頭の中に屈託の日常が浮かび、殺し屋と言う非日常的な、まるで漫画のような世界に一つの希望と光を見出した。
「悪くはない、ですね。でもどうやって？」
そう言うと、突如老人の顔が若返るようになり、皺の一本一本が鋭さを覚える。「先ずはお前を殺す」冗談とはとても思えないような顔で男性は言い、佐薙の顔に一滴の汗が滴る。
「何も、命を奪うなんて言っていない」その男性はその考えを察したかのように付け加える。「お前は、これから行方不明、暫くすれば即ち死亡者扱いになる」そして、続ける。「もう一般的な日常には戻る事が出来ない」先生は断言する。日常への未練が、佐薙の決断を鈍らせる。
「どうだ、それでも良いか？」彼は呟く。佐薙の頭の中で天秤が動き、そして傾き、結論が出る。「是非、お願いします」佐薙は言った。そして生まれて初めて自分で大きな決断をした事に気づいた。
「なら、俺の事はこれから“先生”と呼べ。お前、名前は？」突然フランクな口調になり、名前を問う。先程とはまるで別人かのような声。
「佐薙、です」
「佐薙、か。そうだな、だったら俺はこれからお前をクリサリス、と呼ぶことにしよう」
「クリサリス？」佐薙は問う。

「蛹、という意味の英単語だ」先生はそういう。下らない駄洒落じゃないか、と佐薙はその呼称を断りたくなる。
「まだまだ羽根の生えてないお前にはお誂え向きの呼び名だ。一人前になったときには、別の名前を考えてやるよ」下らない冗談だと思われたくないのか、先生はそういう。

そんな理由で、一瞬のうちに考えられた名前、それを今日まで使われてはたまったものではないな、と彼は思う。
「その呼び方は止めていただけるとうれしいです、先生」
「それは無理な相談だな」
先生、と呼ばれた老人は楽しそうに言う。その老人は寸分の互いすらなく、彼が調べにいった、即ち誰かに死を願われた老人であった。
「仕事は巧くいっているのかね？」
「街中でする話題じゃないんですがね」
「それもそうだな、久々に君の家にでも連れて行ってもらおうかね？」この老獪な男には嘘偽りが通じない、それは佐薙がこの老人を「先生」と呼んで師事していたころから解っている事であった、もしここで断ろうものなら、下手をすれば依頼の事がばれかねない、そう思った彼は素直に彼を自らの家に招き入れることにした。
「俺の車があるから、乗ると良い」俺、という一人称の似合う貫禄と風貌は、その誘いに対して誰一人にも決してノーと言う答えを言わせない。佐薙は首肯すると、焦りを押し殺しながら問う。
「先生はまたなんでここに？」
「老人が街中で流行のものを買っていてはいけないのかな？」どこの店の袋も持っていなく、誰がどう贔屓目に見ても嘘であるようなことを言っているにも拘らず彼はすぐにその後お天道様に恥じることと無く今の一言を言った、とでも言いそうな顔をしている。
「珍しいですね、新しい物は信じられない先生が」彼は純朴な疑問を掲げる。先生は確か、新しいものは駄目だ、信用できない。製品

ができてから十年経って始めて確かかどうかは解る、と常に言ってはずだ、と彼は思い返す。
「人間年を取ると変わる物があるのだよ、俺もまさか今のような事を思いつくなんて、昔はほんの僅かに、欠片ほどに考えることすらなかったな」老人は遠い、そしてどこか哀しげな眼をして、それでも確かに意志の光の宿った眼と声で言う。
「新しい物嫌いを公言していたのを最後に聞いたのは、確か五年程前ですかね」その後に飛び出るようにして町を出た彼にとってはある意味懐かしいともいえる。五年前か、と彼は呟くように一人ごちてから、五年間で自分が一切の成長を遂げてないようなそんな気がして恥じるようにする。先生はそんな彼を気にもかけない。
「五年も経てば昔だよ」途端に今まで年を感じさせなかった顔が一気に老け込んだように見える。昔を懐かしむようにふと微笑む。
「十年一昔と言いますけどね」彼はそれに気づくほど器用ではなかった。
　他愛も無い話を交わしながらゆっくりと二人の男が歩いて行く。傍から見ればおよそ親子ほどにも見える二人は、やはり凡その駐車場に向かう親子がそうするように停めてある車に乗り込む。老いた父親は鍵をハンドルの隣に差し込み、エンジンを蒸かす。そしてアクセルをぐいと踏み込んだ。
「そういえば五年も経てば炭酸が飲めるようになったりするものなんだな」唐突に先生は口を開く。佐薙は自らの汗が噴出してくるのを止めることができなかった。或いはそれはただ彼の妄想に過ぎないものだったのかもしれないが、彼は確かに流れを持った水が頬を流れるようにすら感じた。どうしてそれを、と言う言葉が口をついて出てきそうになる。そして自分が何をもっているかに気づく。炭酸を飲めない物がビールなど飲める由もない。彼は少しだけ落ち着く。
「話し掛けてくれても良かったんだぞ、何も帰らなくてもな」
　不吉な予感が間違っていなかったことを、彼は実感した。もとも

と彼はそのようなもの、所謂勘が非常に鋭い、そしてそれは今においても衰えることは無かった。この老人は確かに気づいていたのだ、そして尾行していたのは俺ではなかった、と彼は気づく。尾行されていたのが俺だったのだ、と。

「気づいて、いたんですか」彼は柄にも無く裏返った声で言う。最早気づかれていたのだ、と彼は激しい焦燥を感じ、狼狽する

「なんだ、あれは俺に会いにきたんじゃなかったのか。てっきり寂しくて着たのかと思っていたぞ」図ってか、図らずか先生は飄々と言う。果たしてそれが本心から出た言葉なのか、それとも俺を試しているのか、と佐薙は疑り、そして探りを入れる言葉を考える。

「顔色が悪いな、もしかしてお忍びだったのか？　いやしかしそれにしては解り易すぎたな。俺には全く意図がつかめないんだが、あれはなんだったんだ？」逆に探りを入れられる、佐薙は常々先生にはかなわないな、と思っていたが今回のことでさらにその思いが強くなる。尾行をしたなら逆に尾行され、探りを入れようとしたら逆に探りを入れられる、常に自分より一手先を打たれる。最早自分の力では遠く及ばないことを痛感する。

「別に、たまたま通りがかって懐かしくてぶらりとしてみただけです。先生がいたなんて全く気づきませんでしたよ」彼は最も無難だと考え付いた答えを吐き出すように言う。

「偶然とは、恐ろしいな」ほんの少しだけ低くなったような、されど先程とは威圧感の全く違う声で言う。

「偶然、私と君は全く同じ道を歩いていたわけだ。ちょっと気になって駅までついていったんだがね、君は何か他の事に心を取られていたのか全く気づいていない様子だったからね。いったい君は、何を考えていたんだい？」

　それは、何故先生が俺に殺されるのか、何故そんな依頼が舞い込んだのかということですよ、と口を突いて出てきそうになる、が、当然本人の前でそのようなことを言える筈も無く彼は「若いうちに悩んで、考えろと言ったのは先生ですよ」と解答になっていない解

答で誤魔化す。直ぐにそんなことも言ったかもしれないな、と返ってくる。
「あの時君は何かとても大事なことを考えていたように思えるな。全く周りと言う周りが見えていないようだった。そんなに悩むことが有るなら、しっかり悩めば良い。そして最善の結論を導き出せたならそれに勝ることは無いんだからな」先生は言う。そして佐薙を見てから軽く微笑む。
「俺は悩んで悩んで悩みぬいて末に今の結論を導き出したんだ、それに一切の後悔は無いさ。お前も悩んだ結果に後悔を覚えちゃいけない」彼が発した言葉にはどれもまるで発されてから直ぐに沈むかのような重さがある、しかし彼の言葉は聞いた者の耳から抜け出さない。
「今日の先生は矢鱈と親切ですね、何か良いことでもあったんですか」佐薙は問う。いつもは冷徹とさえ思える態度で彼を常に翻弄した先生が、今日はあまりにも親身にしてくれるように感じられた。
「俺ももう、長くはなさそうだからな。最近体のあちこちが痛くて敵わん」彼は多くの老人が自らの体の不調を嘆くときのように、小さな声で呟くように言った。しかし佐薙にはそれが別の含意を持っているように感じられた。
「先生はまだお若いですよ」佐薙は軽く笑いながら言う。
「人の命ってのはいつ終わるのか、解らないもんだからな」先生は言う、その命を終わらせる職業をしていた人が何を今更、と佐薙は心の中で思う。
　そうしているうちに車は町を出て、ヒヤマ荘の前に居た。大回りしてからこの近くまでくる電車と違ってやっぱり早いな、と彼は思う。そしてこの仕事が終わったら車を買うのも悪くない、と思う。
「相変わらずこの臭いアパート住いか」先生は呟き、続ける。「こんな所に住んでてもどうしようもないだろうに。早く別のアパート借りるなり家を買うなりしたらどうだ」佐薙の仕事が捗らない事を知ってか知らずかそう言う。

「まぁ、今時家は高いし、お前みたいな仕事じゃ普通のアパートは辛いかもしれんがな」なんだ、知ってたのかよ、相変わらず嫌な性格だな、と彼は心の中で毒づく。
「物凄い金脈を見つけた、と風の噂には聞いたんだけどな。ただの汚れた水脈じゃなければいいんだけどな」
「仕事で稼ぐ予定のお金です、汚いはずが無いじゃないですか。むしろ清清しいくらい綺麗といっても間違いじゃないようなお金ですよ」佐薙は半分笑いながら、半分真面目な顔で言う。何をしても自信を持てないなら意味が無い、先生がいつも言っていたことだ。
「人殺しが仕事の奴が言う台詞じゃないな」
「人殺しが仕事だった人に咎められる事でもないですよね」
「違いないな」先生は豪快に笑う。佐薙は本当に久しぶりに人と話したな、と思い、そしてやはり先生と話しているのは面白いな、と思う。
　下らない話を交わしながら彼らは佐薙の部屋の戸を開ける。殺伐とした、ある意味で清潔感の漂うともいえる部屋が外気を吸い込む。
「もう少し遊べよ」先生は呆れ顔にも近い、それでもどちらかと言うと哀れむような顔で佐薙を見る。
「お前は昔から一つのことに根を詰めすぎるんだ。もっと他の趣味を持てよ。そうでもしなきゃいつか潰れるぞ」諭すように言う。確かに佐薙は昔から無趣味を貫き通してきた、といっても過言で無いほどだった。
「そう、ですね」彼は呟く。「もう少し余裕ができたら考えます」まるで教師に言い訳をする生徒かのように下を向いて、不明瞭な声で。
「余裕はできない」
　突然先生は断言する。その声は今までの飄々とした物とは違う、佐薙が一度だけ見たことがあるものだった。
「お前は死ぬんだ、今ここで」月も不思議と紅く見えた夜、今より

十ほど若く見える先生はいつもの飄々とした声ではなく、まるでそれだけでも対峙する者の心臓を握り潰してしまえるかのような声で断言する。相手の顔に汗が滲み、不思議とそれまでの血色が失われて一度に皺が増えたかのように見える。
「な、何で俺が……？」相手は如何に逃げるか、ということを算段しながら問う。これが揚々と人を殺し続けた男の末路かと思うと、情けないな、と彼は思いながらも、結局のところ、人間最期は皆こんなものなのか、と絶望にも近い
「解らないか、ならお前はそこまでの野郎ってことだな」
上着のポケットから無機質で冷たい拳銃がその姿を見せ付けるかのように現す。
「人を殺したってのはつまり殺されても構わないってことなんだよ」そう呟くと相手に遺言を残す暇すら与えず指の関節に僅かな力を加える。パン、と音がして銃弾が押し出される。う、と情けなく弱々しい声が漏れ、男は力なく頽れる。
ただでさえ人通りの少ない場所、況してや夜に人が現れることなどほぼありえない、彼は形式的に周りを見る。静寂の中には足音一つ響くことを許されない。
「クリサリス、見てみろ。人の死なんて呆気ないものだぞ」先生がそう言うと、クリサリスと呼ばれた十五ほどに見える少年が建物の影から現れる。そして大量の血と、死体を見てから、直ぐに嘔吐する。
「これぐらいで吐いててどうするんだ、それでも将来は……」そこまで言って先生は口を噤む。そして、ふっと息を吐いてから「そういえば俺もお前ぐらいの年にこんなのを見たら吐いてたなあ」と呟く。
「先生は、平気なの？」口から嫌な匂いを漂わせながら少年は必死とも言えるほど辛そうに問う。
「もう、慣れたな」先生はいつもの飄々とした態度に戻り、半ば笑いながら言う。

「それに」少年は不安げに続ける。「先生は誰かに殺されてもいいの？」
「俺が？　何でだ？」先生はまるで本当にわからないかのように首を傾げる。
「だって先生言ってたよ、人殺しは殺されても良いって」そこで漸く解ったかのように先生はああ、と漏らす。
「あんなの、格好つけてみただけだ。いちいちそんな覚悟して人を殺すなんて無理だな、それにその理屈なら俺は百度は殺されないといけない、そんなのは御免だな」そう言うと先生は心底面白くて仕方ないと言わんばかりに笑う。
「俺は、死ぬなら老衰で死にたいな。それ以外で苦しみながら死ぬなんて御免だ」
「殺されるのは？」
「絶対御免だ、殺されるぐらいなら相手を殺す」ぐらいなら、という言葉の意味を間違えているのではないか、と少年は思い、そして笑う。
「よし、じゃあ今日はさっさと帰ろう。こんな血腥い所はさっさとおさらばするに越したことは無い」

それは、確かに一度だけ見た、初めて人の死に出会った紅い月の見えるあの日に先生が発した、あの鋭い言葉と同じ重みを持っているように感じた。
「お前は昔から者を考えすぎるんだ。何も考えるな、そうでないとお前に余裕ができることなど永遠にありえない。色々と考えてみると、世の中のあらゆる物が下らないものに見えて仕方ないんだ」
「でも」そこまで言ったところで遮られる。
「口答えが多い。俺はお前の倍以上生きているんだ、少しは俺の話を聞け」ノーとは言わせないその言葉がさらに鋭く、重く、まるで槍のようになる。
「そうすりゃお前はもっと巧くやれる。才能が有るんだ、俺が言う

んだから間違いないさ」飄々とした口調に戻る。
「解りました、ありがとうございます」
「ありがたいついでにビールでも出してくれないか？　折角俺が出向いたんだから」いつもの調子に戻る。仕方ないので彼は冷蔵庫に一本だけ入っているビールを取りに行く。
「ちょっと待っててくださいね」そう言うと彼は、ふと思いついて、向こうの部屋からは見えないように缶を思い切り振る。客間に戻ると、先生は「俺は温いのが好きなんだ」と言いながら買ってきたばかりの袋から取り出したと思われるビールを勝手に飲んでいる。
「冷えたのは家主様がどうぞ」嫌味を言う時の口調で先生は言う。一本取られた、と彼は思う。
「どうした、飲まないのか？」彼は笑いながら指差す。「まさか振ったりしてる訳じゃないんだろう？」
三分後には、ぐっしょりと濡れた青年と、笑い転げる老人が雑巾でアルコールの入った水溜りができた床を拭いていた。
「お前はいつも詰めが甘い」先生は笑う。「見えないように振ったつもりなんだろうがこんな近くじゃシャカシャカと音が思い切り聞こえていたぞ」そして続ける。「悪戯の才能は無いみたいだな」
「参りました」
それから暫くはお互いの近況を語り合う場となった。お互いにたいした変化は無い、と言っても間違いではなかったが、それでも日常の中で面白い話が多少、主に先生のほうから表れる。佐薙は完璧に聞き手と化していった。

「それじゃ、俺はそろそろ帰る。またな」そう言うと先生は戸を開け、あっという間に帰っていく。話もつき、お互いにお茶を飲んでいるだけのような状態となって若干息苦しさに困っていた佐薙にとっても丁度いいタイミングの退出だった。しかし、彼は一度だけ呼び止める。
「先生は、明日は何をなさるんですか？」

先生は振り向くと、何かを思案しているかのような顔で黙り込む。もしや探りを入れていることが悟られたか、と彼は慌てる。
「そうだな、また夜の散歩でもしようかな」先生は呟く。彼は昔から夜に散歩をするのが好きであった。
「お前こそ何をするんだ」ふと思いついたかのように先生は問う。
「特に予定は、無いです」彼は心の中で、今のところは、とだけ付け加える。
「そうか」一瞬何かを考えるようにして、そして先生はぼそりと言った。
部屋にはただ菓子の置いてあった皿とコップが残っているだけだった。佐薙は一言、またはないんだ、と呟く。それはある意味での彼の決意の塊にも近いものとなっていた。
彼はそそくさと部屋を片付ける。先生の言った一言一言が胸をつく。ただ殺し屋として、では無く先生の洞察力や、実行力、その他色々なものを見て彼は師事していた、そしてその類の様々なものは年老いても衰えることが無かったのだな、と思う。話をしなくても余裕、趣味、その類のものを何も持っていない虚無な人間であることを一瞬で見破られる、正確には昔からその傾向はあったのだが、最近に至るまで変わっていない、むしろその傾向が強くなっていっていることまで見破られたのだな、と思う。何をしても自らの一手先を行き、そして一瞬で手を打つ。今までに何かをして勝った経験が無いことを思い出す
早く、出来うる限り早く実行しなくてはならない。そう思って、実行延期なんて下らないことを言ってたのは何処の誰だよ、弱気になってんじゃねえよ、と笑う。
結局いつも俺は逃げてたんだな、と彼は思う。逃げて、逃げて結局失敗する。言い訳をつくりそれを正当化する、まるで餓鬼の所業じゃないか、と。なら俺はどうすればいい、と考え、結論にたどり着く。殺し屋に理由なんて要らない。殺せ、といわれれば殺せば良いだけだ。そこに良心の呵責は訪れない。狩人は心を痛めずに獲物

を狩れねばならない、殺し屋は心を痛めずに人を殺せなければならない、それだけのことだ、と彼は思う。それをするために俺はこれから、繋がりのある人物を殺す、それだけのことができないなら俺はそこまでの殺し屋なのだ、と彼は自らを納得させる。鞄の中の拳銃がそれに呼応するかのように黒光りした気がした。

そうしてみると、俺が狙っていることに気づいて、諌める為に来たのか何だかは知らないが、それでも結局は俺に決意をさせるだけの結果になったぞ、と彼は思う。いつも一手先を良く先生にしては珍しい、と思う。

彼は拳銃を取り出すと、布で丁寧に磨く。実行前夜の儀式、彼はいつも実行を決意した日の前の夜に磨く。一種のジンクスである。或いは頼みや強要に近いものかもしれない。これだけ丁寧に磨いたんだから、外したりしてくれるなよ、と銃に対して頼むのも不思議な話かもしれないな、と彼は自らを嘲る様に笑うと、それでも、外せないんだ、と強く虚空をねめつける。彼は誰に向かってでも無く、ただ一言俺は勝つ、と呟いた。

彼は電気を消すと、ソファの上に倒れこんだ。鋭気を養い、疲れを取る。最高の状態で臨まないのは、失礼に値する。人の最期を扱うものとして、最低限の、最大の礼儀を以って迎えなくてはならない。彼は直ぐに深い眠りの中に落ち込んだ。

人の死には、暗雲や雨、その類の物が最も似合うという人は多いかもしれない、だが彼は、最高の快晴それこそが人の死に際に最も相応しい天気だと思う、そして空は彼の意図を汲んだのか、それこそ雲など欠片ほどにも存在しない、暑く、気持ちの良い晴れ模様だった。

彼は、自分の体が浮いているのを遠くから見ている、不思議な感覚に支配された。色取り取りの綺麗な花が周りを多い、太陽と月が同時に出ている、常識的に考えればシュールとしか言いようの無い光景の中、彼は浮いている。夢か、と思う間もなく突然、どろどろ

とした竜のような物が自分を食らおうと襲い掛かってくる。そして、それが佐薙に喰らいついた途端、第三者の視点が第一者の視点に変わり、世界はモノクロアウトする。

これは、どこかで見た事がある光景だな、と彼は思いながら再び目を擦る。すると、やはりその光景は白黒から色彩溢れる光景に変わり、賛美歌のような物が耳の中に木霊する、何処で聞いたかも解らない様な歌が耳に心地良い。誰かが囁く。「本当にやるのか？」答えるまでも無い、イエスだ、と言おうとして彼は体が震えて答えられない。俺は、若しかして本当は怖くてやれないんじゃないのか、と自分の中からも疑問が生まれていくのを感じる、だがやるんだ、と強く言う。言葉が形を取らないまま、ぱらぱらと浮き、離れていく。

「そもそも何でお前が殺さなきゃいけないんだ？　わざわざ汚れ役を引き受ける事も無いだろうに」そこまで聞いて、彼は今まで何処でこの声を聞いていたのかを思い出す、いつも決心した日の夜には決まってこの夢を見る。そして、眼が覚めてもこの囁くような声が耳に染み付くように残って、そのお陰でいつも決心が鈍る。結果は言わずもがな、毎度毎度の失敗である。

「仕事だからだ」彼は強く意志を持った声で、必死に答える。「でも、震えてるじゃないか」両耳から囁かれる。不快感に声をあげて叫んでしまいそうになる。「恩師を、殺せるのか？　関係ない人間を殺す事も出来ないお前が」今日はいつもに増してうるさいな、と彼は思いながら、「恩師だからこそ、殺すんだ」と怒鳴りたてる。囁く声は既に形を持った幻影となって、彼を取り囲み、かごめかごめで遊ぶかのようにぐるぐると回りながら、時折耳元に現れて囁き続ける。これが俺の良心なのか、ただの幻影なのか、と考え込んでから彼は、「邪魔者が、去れ」と呟く。「俺は、先生を殺して、その上で初めて殺し屋になれる」

「そうか」幻影は半ば残念そうに、半ば嬉しそうに呟く。「ならば勝手にするが良いさ、その後にどうなろうとな」

幻影は消え、風景は消え、彼は再び心地の良いまどろみに戻る。

「いい朝だ」彼は呟くと伸びをする。そして色々な方向に跳ねた髪を掻き揚げて一つに纏める。そして、黒い服を着込む。喪の意味を持っての黒ではない、闇夜の中で最も見え辛い色、それだけの理由で黒である。彼は礼儀に注意を払わない。ただ、どれだけ効率的な実行ができるか。今はそれだけを考えなければならない。要らない物と要る物をそれぞれ一瞬のうちに取捨選択する。

彼は台所に行くと、簡単な朝食を作り、食べる。サラダの色彩がいやに美しく感じられて堪らなかった。パンや牛乳を無為に飲み込む。味が僅かにしか感じられない。今の彼には緊張、という言葉が最も当て嵌まるかもしれない。殺しをする、と決定した日の食事はいつもこうであった。酷いときには一切体が受け付けないことすらもある。今日は、随分と落ち着いているな、と彼は思った。

食事を終えて彼は新聞を読む。明日は自らの起こした事が一面なり中なりを飾るのだろうか、と思う。今まで成功したことの無い彼はどうなるのか、それすら解らない、そこにある意味での期待にも近いものを感じている自分に軽いおぞましさを覚えながらも、スポーツ選手の活躍が新聞に載るようなものだろう、と割り切る。

そして彼は自らの部屋に座る。ドアの鍵を閉め、誰の進入も許さない。携帯電話の電源も落とし、最早彼を邪魔するものを須らく排除する。そして彼は眼を瞑る。こうしていると自らが少しずつ、落ち着いて標準時に近い精神状態になっていく。そして午後になる頃には標準時を超えて、相当なレベルでの集中力を身につけられる。昼食や晩飯など要らない、もともと小食の彼にとっては二食や三食を抜くぐらいの事はたいした事が無い、むしろ日常茶飯事である。気がつけば、月も綺麗な夜となっていた。

彼はヒヤマ荘を出ると、電車に乗り込む。心臓が高鳴る、ということは最早無い。人の死は時間と言う直線状にある一つの点に過ぎ

ないのだ、と彼は信じている。だから死に対しての特別な感情が起こることは無い、ただしその死は無意味に起こるものではない、とも思っている。矛盾じゃないか、と言われればそれまでだ、ということもまた彼は知っている。だが、それでも彼はそのどちらも真実だと思える、矛盾だと思えば思うほどそのどちらの思いもより深くなっていく気がして仕方が無い。

彼はあまりにのらりくらりと進む電車にやきもきしながら、それでも静かに眼を閉じていた、目的の駅名を伝えるアナウンスが耳に入り込む。

「漸く、か」彼は一人ごちてから電車を降りる。無人の暗い駅を月だけが静かに照らしていた。雲ひとつ無い夜空は人のほとんど居ない、澄んだ田舎の空気と相まって、美しく星達の瞬きを演出していた。

「お誂え向きの天気、だな」彼は呟くと、人っ子一人居ない寂寥の路地を彼は縫うように音も立てずに静かに歩く。

先生の散歩コースは、恐らく変わっていないのだろう、と踏む。従来の散歩のコースとしては最後の方、つまりあまり長くない尾行でリスクを最大限減らせる場所、その近くに暫く身を潜めていると、案の定先生はゆったりとした速度で月を見上げながら歩いてくる。全くこちらには気づいていないのか、一瞥をくれる事も無く、まさにこれぞ散歩、とレポートを書いて提出したいくらいに夜空を満喫しながら歩いていく。

「月の、綺麗な夜だな」一瞬足を止めて、先生は呟くとまた歩き始める。適当に距離を置いてから、それでも間違いなく追える丁度の距離で彼は身を隠すのをやめ、そのまま静かに追いかける。向こうから見える事は厳禁、勘のいい先生を相手にはなかなか分の悪い勝負じゃないか、と思いながらも追う。

自分が覚えているよりも多少長めのコースを先生はのろのろと進みつづける。多少の違和感に若干の焦りを覚えながらも、彼は出来うる限り落ち着いて、冷静に尾行を続ける。ばれさえしなければチ

ャンスは幾度でもある。気づくと先生は誰も居ない廃倉庫群に近づいてきた。袋小路、彼は心臓が高鳴るのに気づいた。この鼓動が闇夜の静寂に響いて、それだけで気づかれるのではないかと思われるほどに早く、強く心臓はその胸を叩き続ける。まさか、気づかれたのか。今日は断念するのが無難か。そう思っていると先生は廃倉庫郡の最奥部の最早使われていないであろうベンチに腰掛ける。月を見上げて、ふっと息をついて目を瞑る。佐薙は決心した。

誰も動かない、静寂が場を占め、そして闇夜は全ての光を飲み込んだかのようだった。その暗い闇世の中、にょきりと黒い銃身が静かに標的へと真っ直ぐ伸び、その銃のグリップを握り締める長身の男の鋭くぎらつく眼差しは確かに標的を捉えたまま、微動だにせず、男の胸は音も立てず静かに上下する。ふっと静かな溜息が漏れ、そして直ぐにその冷たい銃口から鉛の玉が音速を超える勢いで飛び出す。リボルバー式の拳銃はその構造ゆえにサプレッサーの効果を望めず、ひゅんと空気の張り裂けるような甲高い音が静寂を切り裂くも、哀れな標的にはその音に首を上げる暇すら与えられない。先生は一瞬後ろに仰け反ると、佐薙の位置からは見えないが、恐らく血煙をあげて、そしてそのあと前に倒れこんだ。

一瞬の喧騒の後には先程と同じ、何も変わらない再び静寂が戻る。「やった……、か」彼は半分放心して呟く。初めてではない、拳銃の引鉄を引くのは。初めてではない、実弾を放つのは。しかし、その何れの時とも違う不思議な感触が、スーパーマーケットで感じたどろりとした絶望にも似た、或いは同じかもしれないその不思議で、不快な感触が彼を包み込む。彼は同じようにして膝を落とし、尻餅をつく。死と言う概念に対して今まで感じていたのとは全く違う気持ちが生まれ、そしてその後まるで先生の全てが流れ込んできたかのような錯覚を感じる。久方ぶりに、人の死に関して吐き気を催した。

暫く呆然とした後、はたと我に帰る。先ずは見つからないようにこの場から離れる事、それが今の彼に求められている最も重要な事

であり、唯一の事である。彼は立ち上がり、尻を叩くと彼は一度だけ先生、正確には先程まで先生だった肉塊を見る。一瞬生死を確かめたほうが良いか、と思って歩み寄ろうとするが、確実に額を打ち抜いた自信と、またこの場に長くいる事に伴うリスクを天秤の右に、先生が死んでいない可能性を天秤の左に載せると、あっという間に右側に傾く。それに、ある意味では彼は自分が先生を撃ち抜き、殺したと言う事を認めたくなかった、正確には認められなかった。振り返ったら、それを認めてしまうようで。そして、それを認めると言う事は即ち自分が師事していた数年間が虚無に消える事にも等しいように感じられた。

彼は振り向くと、「あばよ、先生」と呟き、走り去った。もう二度と振り返る事は叶わない、と思う。不思議な虚無感が体の中を駆け巡っていくようだった。

人を殺した翌朝、というものの寝起きはさほど良くなかった。初仕事を終えた翌朝、と言えば聞こえは良いものの。彼は朝食を食べる気にもならず、遅い朝を迎えた。太陽は凡そ南中し、既に周りは今日の昼食を何にするか考えているような時間であった。彼は時計とカレンダーを確認する。鞄から拳銃を取り出し、残弾数を数え、昨日の出来事が下らない夢ではなかった事を再確認する。夢だったら良かっただろうか、夢でなかったから良かったのだろうか、彼はそう考えながら痛む体をソファから起こす。

そして希望とも絶望ともつかない面持ちで新聞を確認するが、それらしきニュースは一切見当たらない。おかしいな、と思ってふと笑う。あんな過疎と言う言葉を三次元化させたような町で独り身の老人が居なくなろうと、誰も気づかない。気づいたとしてもそれは暫く後の事ではないか、と。逆にニュースが無いというのは、自分が確実に仕留めた事を証明してもくれた。流石に血だらけの老人が町を歩いているならいくら過疎化した町とはいえ、誰かが通報なり救急車なりを呼ぶのは間違いない。それがないということは恐らく

今でもあの人通りがゼロといっても間違いない廃倉庫群の一角で倒れたまま野風に晒されているのであろう。まさかそれが人の命を売買していた者の末路とは思えないな、と考えてから、自らがそこに倒れている錯覚に身震いする。俺も同じ穴の狢なのだから、最終的に誰かの恨みを買って、同じように殺されるかも知れないな、と思う。

彼はテレビをつける。下らない情報をマスコミが限りなく薄めて、限りなく誇張しながら必死に主張している。もしかしたら自分もこれに将来的に取り上げられるのかな、と思い、ふと笑みが零れる。暫く見ていると、ドラマが始まる。殺人を扱った一般的なサスペンス物で、結局最後は犯人が逮捕されて、ハッピーエンドとなる。犯人は理由を叙述し、懺悔し、そして安寧とともに半ば幸せそうとも言える顔で逮捕されていく。それを見ていると、虚実は随分と違うものだな、と思う。俺は理由なんて求められてもそもそもその理由をもっていないし、それに懺悔なんて欠片ほどにもしていない。ただ、不思議な虚無感が漂うだけである。途端、ぐうと腹がなる。途端、日常が非日常を押し退けたのを感じる。いつものファストフード店に行くことにした。何度も連続してファストフードばかりを食べるというのは、体に相当悪いと聞いたことがあるが、そんな事は気にしない。手軽で、早く、そして何より安い。それだけ理由が彼をファストフード店への道を歩ませる。

自動ドアが開き、彼は店に入る。ある意味人間的にある意味機械的に店員が注文を取り、そしてそれは瞬きをする間に目の前に現れる。彼はそのトレイを持つと、席に向かう。これは、祝杯だな、と思いながら彼はハンバーガーをむさぼり、フライドポテトを流し込む。様々な視覚情報が周りから大量に入ってくるが、そのどれもが脳内でジャンクとして消えて行く。彼はジュースを飲み干した。漸く一人前になれた俺に乾杯、と呟く。

彼はファストフード店を出て、真っ直ぐ家路に着く。そして、ヒヤマ荘を見る。そろそろ先生の言っていた通り、ここからおさらば

するのも悪くは無いな、と思う。そしていつもどおり古臭い、錆びた階段を上る。ぎしぎしと軋む音が今日は心地良くすら感じる。
彼は自分の部屋に入ると、携帯電話を取り出し、開く。そして一つのアドレスを選び、電話を発信する。暫く呼び出し音がなった後、ついこの間聞いたばかりのおどおどした便りの無い声が聞こえる。
「はい、こちら松岡です」
「俺だ、仕事は完遂した。今すぐこちらに来い」一方的に用件を叩きつける。俺が誰かと言うのは発信記録を見れば解る筈である。
「今すぐですか、はい、解りました」相変わらず情けの無い声だな、と思う。そしてそのまま「では、三十分後に」という声が聞こえて、通信が切断された。彼は戸棚を開けると、グラスとコースターを各々二つ用意する。デスクの上にコースターを並べ、その上にグラスを置く。暫くぼうっとテレビを見てから、時間を確認する。後十分も無い、彼はグラスの中に氷を入れ、冷蔵庫から取り出した麦茶を注ぐ。
八分ほど経ってから、チャイムが鳴る。そしてドアが開く。おどおどしたチェック柄の服を着た男が入ってくる。「人の家に出向くときは少し遅めにくるものだ」佐薙は言う。「まあ、座れ」
事の顛末を一から説明する。何の嘘も誇張も無く、客観的に事実だけを叙述していく、まるで事情聴取をされた犯人のようだな、と彼は思う。
「そうですか、では依頼金を払いますね」彼は空の封筒と札束を出す。そして札束の枚数を佐薙の前で数えながら、封筒に入れていく。
「これで、全部です」彼はそう言うと、グラスの麦茶を飲んだ。佐薙はその一つ一つの動きを確認する。そして首肯した。
「さて、ところで少しだけ個人的な話がしたい。良いか？」佐薙は先生のやるような、有無を言わせない威圧感のある問いかけをする。
「どうぞ」
「なら単刀直入に言う。あの爺さんを殺させた理由は何だ？」佐薙は率直に聞く。そこに一切の誤魔化しは混ぜない。ただ、単純に聞

きたい事だけを。
「それは、私には解りません」男は突然今までのおどおどとした態度とは少し違った声で言う。
「知らない？　ならお前はふと見ただけの老爺をあんな巨額で殺せ、とでもいったわけか？」探りを入れるように訊く。
「まさか。私はただ上に言われただけです。ただの連絡役に過ぎません」予想通りの答えが返ってきたことに佐薙は軽くほくそえむ。
「上、か。予想通りだな。お前は何故あの爺さんが殺されたんだと思う？」
「うちの組に、何か恨みでも買ったのではないでしょうか？　時々ボスと一緒にいるところを見た事が有りますので」彼は言う。
「なるほどな、解った。もう帰って良いぞ」
「ありがとうございました。また頼みにくるかもしれません」
「そのときは、ご贔屓に」
そう佐薙が言うと彼は軽くお辞儀をして部屋を出て行く。彼はふう、とため息をつく。アドレナリンの類の物が脳内から消えていったのか、先程までの揚々とした気分が一気に落ち込んだようにも感じる。何故あんなに気分が良かったのかも分からない。俺は大事な繋がりを失った、それも自分の手で切り裂いたのだ、それは大変な事だ、と彼は思う。仕事だから、と割り切ったのか、殺した事に対する悔恨の念は無い。だが、それとはまた違う無情な虚無感が体を改めて支配する。堂々巡りが始まったな、と彼は手を組んだ。
「先生、あんたなんで殺されたんだろうな」誰にでもなく、問いかける。答えは返ってこない。唯一つわかるのは、先生が残していった置き土産だけである。
俺は漸く殺し屋になれたんだろうか。ふと疑問が生まれる、今度の疑問には答えが返ってくる。「俺は、一人前の殺し屋になれたんだ」
彼は報酬を確認しようと封筒を開く。尋常には考えられない量の札束が落ちてくる。律儀に札束の数を数えると、札束を一枚一枚チ

ェックする。彼は欺かれる事を最も嫌う。しっかりと時間をかけて、全ての紙幣が本物で、尚且つ相手の提示したとおりの量があった事を確認すると、彼はふう、と息を吐く。封筒の中に、もう一つ、小さな白い封筒が目に入った。

まさか次の依頼でも入れてるんじゃないだろうな、と彼は封筒を取り出す。恐らく手紙のような物が入っているであろうその小さな封筒を彼は開く。これはいよいよ本当に次の依頼かもしれないぞ、と彼は中の手紙を取り出した。見覚えのある、嘗て自分が慣れ親しんだ字が瞳を突き抜けて、視神経を無視して脳に直接映り込むようだった。

「拝啓、佐薙君へ」その文体で始まる手紙はほぼ、というより確実に間違いなく先生によって書かれた手紙だった。何故報酬の封筒の中から先生の手紙が現れるんだ、と彼は混乱する。様々な推測が頭の中を一瞬にして駆け巡る。

「この手紙を読んでいる、ということは恐らく君は仕事を初めてこなしたのだろうと思う。そして私は最早この世には存在しないのだろう、正確には肉塊なり骨なりになってどこかに転がっているか埋まっているかしているのかもしれないが。冗談はさておき、恐らく君は今回の事に関して様々な想像をしているだろうし、同じく混乱しているのではないかと思う。だから全ての事を伝えようと思う」一体何が真実なんだ、今回の事は一体なんだったんだ、と彼は寧ろその文面を見て混乱する。慌てて次の行に目を移す。

「殺せない殺し屋に存在する意義は無い。これは私が昔君に教えた事だったのではないかと思うし、恐らくこれは間違いが無い。仕事をこなせない者にその職業を誇らしく語る資格は無い。だが君はどうしても人を殺す、ということに対して踏ん切りがつかないようだった。そろそろ生活が苦しくなってきたのではないか、と私は想像をした。そしてこのままでは君は飢えるか、何らかの方法で飢餓枯渇を乗り越えたとしても、これからずっと使えない殺し屋のまま、陽に当たらずに、そしてそのまま陰の中で腐りきるのではないか、

と危惧した。先ず私を殺せ、という依頼を君に与え、その後に徹底的な恐怖を与え、そしてそれからは無数に隙を作る。一瞬でも君がタイミングをつかんで、そのまま引鉄を引きさえすれば私の精神が血煙とともに消えてなくなるように。そして君にはその事について沢山悩んでほしかった。そしてその上で自らが導き出せる結論にたどり着いてほしかった。これは私の思い上がりかもしれないが、私は恐らく今までの君の人生の中では最も繋がりを深く持てた中の一人ではないかと思う。そして、それを殺せるか否か、それだけで君が殺し屋として大成できるのかどうかは決まるといっても過言ではなかっただろうと思う。だから私は賭けてみた。この命をレートに、君が殺し屋になれるのか、それともなれないのか。そしてこの手紙を読んでいるなら君は、ある意味での賭けに勝利したのだろう。まさか私が後輩の指導のために、文字通り命をかけることができるなんて嘗ては思いもしなかった。だが、私の残りが後僅かだと知ってから、君には私になってほしい、と思い始めた。この年まで結婚する事も無く、子供も居ない私だから、私の血を誰かに継いでもらうことは出来なくなったが、私の魂を継いでほしいと思うようになった。私を君が君の手で殺す事によって僕の魂を君に託してみたくなった。後先短い老人の勝手な独り善がりと言われればそれまでなのだが」ここまで読んで、彼は嘘だろ、と呟きたくなった。だとしたら、俺は今までずっと先生の手の中で踊らされていただけなのか、全て先生の思惑通りだったのか、と思う。そして先生を殺したとき、何かが流れ込んできたような気がしたことを思い出す。俺は、確かに先生の魂を継いだのか、と思う。次の行に目を遣る。

「私は君と過ごしていた時間が一番楽しかった、これは間違いなく自信を持って言うことができる。私の魂を継げるのは君だけだ、と信じている。君は最早クリサリスとして存在するべき器ではないはずだ。繋がりと言うこの世で最も硬く、この世で最も脆い鎖を破る事が出来た君は、間違いなくこれから君の唯一信じるべき信念の下に過ごす事が出来るだろう。余裕も出来るし、趣味だってもてばい

い。君は、最早蛹じゃないんだ。羽ばたく事が出来る羽根を手に入れた筈だ。さしずめ、君は蝶だ。自由に、生きていけ。そのためにも私の車は君に上げよう。どうせ誰も乗らないような襤褸車だが、それでもよければ使ってくれると嬉しい。私の家も上げたいが、流石に近所との付き合いの関係上多少拙いだろうから、なるべく手をつけないほうが良いかもしれない。中のものは自由に持っていってくれて構わない。臭い事を言って、最後に格好をつけさせてくれるなら私は君と共に生きたい。一人前の殺し屋として、誇りを持って君がこれからの人生を過ごしていけることを祈る。今まであれだけ一緒にいながら一度遣る事すら出来なかったプレゼントだ。纏めて受け取ってくれ」虚無が彼を襲うのを感じた。そして、あらゆる感情が心と言うダムを突き破り、その決壊と共に体の中を鬩ぎあう様にして支配をする。プレゼント？　自らの死が？

自分が今、どのような感情を持っているのかを自分で把握する事すら出来ない。良いものでいえば達成感、安堵の様な物が色々と心を覆うようにする、しかし同時に怒り、疑問、不安、その他諸々の同じ負の感情がその正の感情を打ち壊して、あわよくばそのまま心を砕かんと押し寄せてくる。自分が制御できないことに苛立ちを覚える。くそ、と呟く。そして全てヒントはあったんだ、と気づく。昔では考えられない、そして今は考えられる決意。それは即ち自らの命を捨ててまで何かを成し遂げようとする事。彼は命を捨てる事こそが最も愚行だと何度も言っていた。寧ろその彼だからこそ、今回のような事をしても最後の最後、ネタばらしをされるまで欠片ほどにも考えられなかった。最期の壮大な仕掛けが爆発したかのようだった。ある意味で、美しいようにも思えた。

今なら平気で依頼をこなせる。間違いない、と彼は呟く。先生の最期のプレゼントは無駄に出来ない、と彼はひとりごちる。これからどうするか、と彼は考えた。

兎に角、車を取りに行こう。折角くれると言っている物を無駄にする必要は一切無い。そして、鍵が何処にあるかを書き忘れてるじ

ゃないか、と笑う。先生は昔からせっかちだった。最期の最期までそれは変わらなかったのか、と思う。

追伸、と慌てた字で書いてある最後の二行ほどが見える。

「危なく書き忘れるところだった。鍵は私の家のサイドボードの上だ」

ありがとよ、という言葉がぽろりと零れ落ちる。そして初めて涙が頬を流れてきたのを感じる。俺は何処まで行っても甘ったれた人間なんだなあ、と思う。そしてその上で俺は殺し屋と言う職業で生きていくんだろうなあ、と思う。今度からは車で移動できる、そして報酬の額を思い出す。ヒヤマ荘とはおさらばだ、俺は新しい、それは小さくても構わない、それでも清潔な部屋があるといい。借り部屋でも、一軒家でもどちらでも良い。俺の城をそろそろ持つべきなんだ、と思う。

これから暫く乗る事は無いであろう電車に乗るべく、彼は駅へと向かった。その歩調と背中はある意味、自信に満ち溢れているかのようでもあった。

（後書き）

はじめまして。古賀勇樹と申します。この作品は恐らく簡潔と言う形になった初めてのものなので、誤字脱字、変な文章等多数あると思います。どうぞ温かい目で見ずにメッセージ等でガシガシ教えていただきたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3153f/

クリサリス

2010年10月8日15時07分発行